

18. 籐細工（とうざいく）

「籐」は英語でラタン（Rattan）といいます。家具やかごなどのラタン製品は、年月を経るごとに色合いを増し、今も人気があります。中国を通じて日本に入ってきた籐は、輸入品ということもあり、とても高級なものでした。長らく武器や防具に使用されていましたが、江戸時代に各地で籐細工の小物を作るようになり、松江でも製作が始まりました。

松江の籐細工の歴史を見てみましょう。

江戸時代 松江の籐細工製作は、雑賀町に住む松江藩の下役人が始めました。彼らは、勤番などで江戸に行った際に籐編みを習い、内職として製作をしたもので、文政期頃には雑賀町で煙管筒（きせるづつ）が製作されていました。

この煙管筒は質がよく、当時、一本一両だったといわれています。八軒屋町の鳥屋新兵衛により大阪へ移出されていました。幕末以降の様相を示す明治9年（1876）発刊の「皇国地誌」に「編籐煙管筒 三千、大坂に輸送す」と書かれていることからそれが窺えます。



極細一染編煙管筒（長崎仲蔵作）
松江歴史館蔵

その後 明治時代になると、欧米から紙煙草や葉巻が伝わり、次第に煙管が使われなくなりました。時代の流れにより、松江の籐編煙管筒も作られなくなったようです。大正時代から昭和初期にかけて籐細工が流行し、籐椅子や籐卓、籐駕籠やベビーカーなど、籐製品の種類が豊富になっていきます。昭和4年



石畳編炭斗（2代福太郎作）



花結底一染編炭斗（3代千代市作）

(1929)の『島根県統計書』の「籐製品」にも、「履物表」「敷物」「卓子(たくし)・椅子」「バスケット」などの項目が並び、昭和元年から4年にかけて生産額が多くなっています。

松江の籐細工は、松江藩で料理方を務めた長崎家が現在まで受け継いでいます。長崎家も江戸で籐編みを習い、製作をしていたようです。明治4年(1871)の廃藩置県後、長崎仲蔵が家業として籐細工を始め、子の福太郎が「花結び編み」を考案しました。昭和9年(1934)、4代目の森山誠一がバーナード・リーチの指導を受け、それまでの籐椅子や卓子の他に、「土瓶の柄」「屑籠」「盆」を製作し、民藝品としての道を拓きました。

戦後、安価な工業生産品におされ、手仕事の工芸品は需要を狭められていきました。松江においても、籐細工職人は長崎家のみとなります。しかし現在、この花結びの技術が角 宏子氏(松江)、川口淳平氏(米子)に受け継がれ、籐細工職人は技術の伝承者を少し増やしています。



バーナード・リーチ指導による一楽編
ナブキンリングの試作品
松江歴史館蔵



バングルと花結びのブローチ(長崎誠作)
個人蔵

歴史(そもそも) 日本では、古くから葛などの蔓を利用した蔓細工が製作されていました。「葛籠(つづら)」の名称からもその名残がうかがえます。また、竹細工や藁細工なども同様に、古代から広く製作されてきました。

東南アジア原産の籐が日本に入ってきたのは、中世初期だといわれています。貴重で高価な籐は、主に弓や太刀などの武具の装飾に利用されていました。例えば、広島県の厳島神社には、平安時代の作品である「錦包籐巻太刀」がありますし、鎌倉時代に成立した「平家物語」などの物語や絵巻物には重籐(しげとう)の弓を持った武士の姿が見られます。この流れで、近世になると籐細工の多くが武家の内職となりました。

(高橋 真千子)

【参考文献】

- ・太田直行『島根民藝録』島根民藝会、1935年
- ・鈴木敬三『初期絵巻物の風俗史的研究』吉川弘文館、1960年
- ・川口淳平商店編「籐のかご」、2017年
- ・大塚長四郎『籐工芸』誠文堂新光社、1939年